

中央エリア

## 二上り踊り 竹でカチツカチツ

福山夏まつりは、二上り踊りで幕を開けます。各種団体がチームを組み、駅前商店街を踊り歩く様子は、福山の夏の夜を彩るイベントとして定着しています。

胡弓や尺八を基本リズムとして、三味線の2本の糸を本調子より高い調子上げて踊りやすくしたところから、



二上り踊り

「二上り踊り」と呼ばれています。曲調は優雅で、気品と哀調が巧みに交錯した独特のリズムは、見る人を踊りの列に誘い入れます。

起源については、水野勝成が入国して以来のものだとも、江戸末期に江戸詰の福山藩士によって、江戸の二上りの曲調が招来されたともいわれていますが、定かではありません。

1818年（文政元年）に菅茶山が著した『御問状答書』秋の部7月「踊の事」には次のように記されています。「安永（1772年～1781年）の



二上り踊りの原形  
備後国福山領風俗問状答の中に、江戸時代の「新しき踊」の様子がうかがえる絵が描かれています

頃より一種の新しき踊追々流行仕り、自然と前々の事もやみ候て、市中はそれのみに相成候。唱歌に、花とよばれて咲かぬもくやし；杯とうたひ、三弦尺八鼓弓など入りまじり、打つれてあ（歩）りきながら踊り候。昔のごとく輪になり候事は無御座候。」

この「新しき踊」に、二上り踊りの原形を垣間見ることが出来ます。

昔は、思い思いの服装に折笠をかぶったり、手拭いで顔を隠したりして、うちわでホイッホイッと調子をとりながら踊っていたようです。現在は、男は鉢巻き、あるいは頬かむり、揃いの浴衣の尻はしよりという出立、女は編笠に面を包み、浴衣の裾をからげ、手には男女共に4枚の竹を持って、カチツカチツと調子をとりながら前方に少しずつ進んでいきます。

1961年（昭和36年）には、広島県無形民俗文化財に指定され、保存会によって継承されています。

（1993年8月号に掲載）

## 国宝 明王院五重塔 朝日に向う朱色の塔

明王院は草戸町にあり、十一面観音立像を本尊とする真言宗大覚寺派の古刹です。芦田川の河口近くの愛宕山のふもとにあり、朱塗りの美しい五重塔で有名です。山門に立つと、福山市街地が眼下一望の下に見渡せます。江戸初期の俳人、野々口立圃は、随筆『草戸記』の中で境内の情景を次のように記しています。「南は海遠して朝霧に嶋かくれゆく船、波の音もしつかなり」、「名もしらぬ鳥の声、竹の林にさわたり」、「朝日にむかひて」建つ五重塔は



五重塔と本堂

美麗であると。

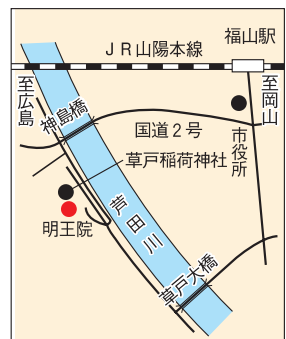
五重塔は、南北朝時代（室町時代初期）の1348年（貞和4年）に建立されました。仏塔最上部の屋根の上に柱状の相輪が立ち、その下部に伏鉢が付設されています。実は、その伏鉢は陰刻銘があり、「貞和4年」に「一文勸進」の「小資」を募金して建てた経過が刻まれていたので、建立年代が判明しました。当時の草戸千軒町をはじめ福山地方の民衆の合力によって建立されたと思定されます。

緩やかな屋根の勾配、見事な組物は寸法も均整がとれていて、幾何学的に整理統一されています。最下部の基壇から突先の宝珠まで約30m。10世紀建立の京都の醍醐寺五重塔と同じ形式で、国風の和様建築です。全国21の指定文化財の中で5番目の古さを誇っており、



五重塔の内部

1953年（昭和28年）に国宝に指定されました。



五重塔は真言密教の中心尊である大日如来を建築の形に表したものであるといわれています。五重塔の初重内には如来中の如来である大日如来坐像が安置されています。この像が造られたのは、塔の建立と同じ南北朝時代の優品であると推定されていますが、塔内は建造物や彩色保存などのため公開されていません。

明王院には、国宝の十一面観音立像を安置する本堂のほか、県重文の山門や庫裡、書院、そして市重文の護摩堂、鐘楼などがあり、文化財の宝庫です。石造りの鳥居を通り石段を上がる道は、愛宕神社につながり、一帯は閑静な草戸山公園になっています。

（1994年1月号に掲載）

## 両社八幡宮

### 東西同じ形式で並び建つ

福山八幡宮は北吉津町にあります。八幡宮入口の総門の前には、きれいな小川が流れています。江戸初期に造られた福山水道の貯水池である、蓮池から流れている御手洗川です。その小川には、見事な石橋が二つ架けられています。

それぞれの石橋を渡ると、総門も二つあります。本瓦葺の重量感のある門で、薬医門といわれる形式です。この総門には、それぞれ「東御宮」、「西御宮」と墨書した木札を掛けています。東の八幡宮（延広八幡宮）と西の八幡



東御宮の総門  
約50m西へ行くと同じ形式の総門があります

宮(野上八幡宮)の2社の八幡宮であって、両社八幡宮といわれています。実は、新町延広にあった延広八幡宮と、野上口の古宮地にあった野上八幡宮の二つの八幡宮が、1683年(天和3年)に現在地に移され、同一形式で造営されたものです。

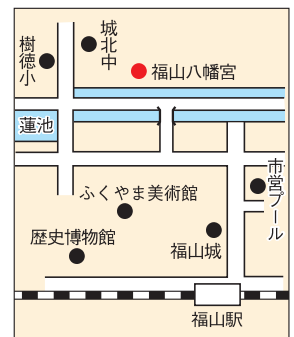
左右の石灯籠の間と、朱漆塗の木製鳥居を通り抜けると、石造の狛犬が迎えてくれます。長石を敷いた石段を上がると、隨身門が建っています。雄大な切妻造の八脚門です。寺院の仁王門に当たるもので、左大臣(左)、右大臣(右)の隨身像を安置しています。そして、正面には拝殿、幣殿、本殿が3棟つながり、権現造になっています。また、組物などには極彩色が施され、美しい外観が良好に保存されています。



西御宮の本殿  
この後方に、聰敏神社や鍛冶神社などが祭られています

このように、本殿や拝殿、幣殿、隨身門、狛犬、鳥居、総門、石橋が、東西同じ規模、同じ形式で建つ遺構は、全国的にも珍しく、改変せずに保存したものです。

この八幡宮では、江戸時代、祭礼行事に加えて、芝居や角力も行われていました。また、神能も盛んで、現在ではその伝統を継承して7月下旬には「薪能」を行っています。7月30日には、夏越の祓いといって夏に流行する疫病払いの茅の輪くぐりもあり、10月10日には、6体の神輿巡行の祭礼もあります。境内には、聰敏神社や鍛冶神社なども祭られています。また、後山の森間として林の中の小道を散歩すれば、良神社に出られます。



(1994年4月号に掲載)

## 観音寺本堂

### 華麗な装飾・折衷様式

福山城の北に位置する宮川筋は、北方防備の目的で配置された神社仏閣が連なり、城下町の雰囲気而今に伝えています。今回はその中から、観音寺本堂を紹介しましょう。

創建・沿革は明らかではありませんが、1619年（元和5年）に福山藩主として入府した水野勝成が、福山城の築城と城下町を形成したのに伴って、移築整備したものと思われます。

表門を開くと、均整のとれた本堂が、歴史の流れを越えてたたずんでいます。



観音寺本堂  
本格的な近世密教寺院。折衷様式の変遷を考える上でも貴重な建築物です

1651年（慶安4年）の棟札があり、棟梁は小川又右衛門孟親と書かれています。

本瓦葺の入母屋造りの屋根が、拝観者に重厚な感じを与えます。軒に視線をやると、それを支える組物は、尾垂木入りの唐様二手先組物となっていて、組み方が複雑で、構造の美しさを楽しませてくれます。少し近づいて見ると、向拝（本堂から正面に突き出た部分）の木鼻（横木が柱から突き出した部分）に施された彫刻などの装飾）に想像上の動物である獺が刻まれており、興味を引くとともに、唐様の手法の素晴らしさに驚かされます。

内部の特色は天井にあります。まず外陣（人々が拝座する所）は、大きな梁を前後に架け渡しています。前方



修理、彩色された向拝の内側



は天井を張らずに屋根裏を見せるため、大胆な構架法が用いられ、極彩色仕上げとなっています。後方は、明王院本堂に見られる船の底を思わせる輪垂木天井をかけ、見る人の意表をつきます。また、内陣（本尊を安置する所）は、外陣が唐様色濃厚なのに対して、和様で古式な折上小組格天井となっています。本尊が安置されるのにふさわしく、上品で落ち着いた感じをかし出しています。

このように観音寺本堂は、中世以降瀬戸内で発達した折衷様式を継承しながら、桃山時代にさかんとした装飾手法を駆使しているところに特徴があります。近年注目され、1991年（平成3年）に表門とともに県の重要文化財に指定されています。

（1994年11月号に掲載）

## 伏見櫓と筋鉄御門

### 京都伏見城の遺構を残す

福山駅から優美な三層の櫓と筋鉄御門とが目前に望めます。福山城の本丸跡に現存し、国指定の重要文化財です。

この三層櫓と筋鉄御門は、実は京都の伏見城から移築されたものです。

伏見城は、宇治川と桂川との合流点で淀川に通じる、大阪への交通の要所に位置しています。豊臣秀吉が1594年（文禄3年）から1597年（慶



朝日にはえる白色の櫓  
左・伏見櫓、右・筋鉄御門

長2年）にかけて築いたもので、邸宅的な城郭です。秀吉の死後、徳川家康が居住し拠点としていましたが、1600年の関ヶ原役の前哨戦で焼失しました。

その2年後、家康は、豊臣秀頼のいる大阪城や西国大名の押さえとして、再建しましたが、一国一城令の先触れの目的もあって、1623年（元和9年）に廃城にしました。伏見城の遺構は、姫路城門や京都の寺院などに移築されました。

福山城は、1622年（元和8年）に完成。その後、伏見城の建造物の「松ノ丸三階櫓、筋鉄御門、能舞台」などが福山に移されたら、江戸時代の



筋鉄御門

さまざまな書物に記録されています。また、1953年、三層櫓を解体修理した時、梁に「松ノ丸東やぐら」と陰刻しているのが発見されました。伏見櫓といわれるゆえんです。

この三層櫓は、桁行8間、梁行3間の入母屋造りです。広大で、豪華壮麗な城郭の伏見城にあり、本丸の東南部の物見を兼ねた隅櫓でしたので、福山城郭の中では異様に大きく、異彩を放っていました。初層、二層は白亜塗とし、三層は土壁造りの塗籠めになっ

ていて、白色の優美な櫓です。  
筋鉄御門は、本丸跡の正門であり、左右に石垣を積み、脇戸を付け、櫓をのせた門です。伏見城は、宇治川沿いの大手門から本丸まで約3km、徒歩で40分もかかります。大手門から三の丸、二の丸、本丸へと9棟の門があり、どの門を移したのかは判明していません。門扉には縦に12条の筋鉄を釘打ちにし、乳金具で飾っています。

伏見櫓や筋鉄御門は雄大ですが、優美さもあり、慶長期の特徴をもった建造物です。

（1995年1月号に掲載）

## 旧内藤家長屋門 武家屋敷の遺構



移築前の長屋門  
現在の美術館の西側にありました(写真の左端)。  
その前に見えるのは外堀です

福山市は、城下町でありながら、1945年(昭和20年)8月8日の戦災により中心部の8割が焼失するなど、城下町を偲ぶ町並みや建造物はほとんど残っていません。そんな中で、めずらしく江戸時代の武家屋敷の長屋門が遺存しています。それが今回紹介する旧内藤家長屋門です。

この長屋門は現在、福山城北西の小高い丘、小丸山の南面に隣接して建っていて、ふくやま美術館からも眺める



現在の長屋門  
ここから美術館の噴水、前庭などが見られ、通り抜ける風もさわやかです

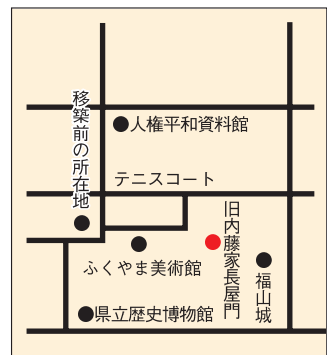
こともとは、福山城の西外堀北側に面した位置で、家老職の内藤氏が居住していた所にありましたが、城下町福山の様子を察知することができると貴重な建造物として、1975年(昭和50年)に福山市重要文化財に指定、翌年補強整備され、現在地に移築されたものです。その際、「弘化三年」(1846年)の墨書が発見され、江戸時代後期の建築であることが明らかになりました。

構造は平屋建てで、入り母屋造りの棧瓦葺。桁行17.73m、梁間2.955mと東西に長く、さらに東西に各々袖塀が付きまます。中央に引き戸が

あり、東西に畳敷の居室を設けています。東側は、内藤家で働く人が居住する部屋で、4畳半と3畳の2部屋にわかれ、西側には土間と、客を連れて来た人に休憩してもらおう6畳部屋が作られています。いずれの部屋も入り口は北側で、南側上方には武者窓が3か所開かれ、白壁と腰下板張りとともに、外観の美しさを形成しています。

長屋門が所在していた内藤家は、福山藩主阿部氏の家臣でした。

今日、ほとんど江戸時代の屋敷が姿を消し、城下町の風情を喪失した中で、この長屋門はよく維持保存され、藩政時代を偲ぶにふさわしい遺構となっています。小丸山周辺とともに、一度散策されてはいかがでしょうか。



(1996年6月号に掲載)

# 福山城門

## 旧福山城の遺構

鞆港の中央部の古い町並みの一角に、旧福山城の遺構を伝える長屋門が保存されています。現在は、江戸時代からの鞆の津の名産、保命酒の店として活用されています。

福山城は、1622年（元和8年）に完成し、南側の「大手御門」や「東御門」「西御門」などがありました。

福山城の本丸跡には、国指定の重要文化財「筋鉄御門」が現存しますが、これは、元和8年伏見櫓と共に伏見城から移築されたものです。福山城固有



水野時代の城門  
今は、右側の長屋はありませんが、雄大な門であったことが分かります

の門は、今の福山城公園にはなく、水野時代の城門は、この保命酒の門だけです。

建物の構造は、本瓦葺で入母屋造りです。門に多くの住込み部屋が付いている形式から長屋門といえます。向かって左側に番所が付属しています。

番所の腰は下見板張りで、格子づくりの出窓を設け、上方は軒下まで漆喰塗壁で、武者窓2か所を開いています。

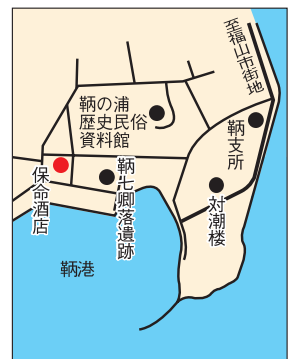
正面の桁行は約17m、門幅約7m、左側の長屋幅は約10mです。軒高は3.3mもあります。最初の長屋門の姿は、

門扉を中央にして左右対称に長屋があり、桁行は約27mの雄大な門でしたが、現在は右側の長屋がありません。

軒丸瓦には、「丸に沢瀉一葉二花」



福山城を東から望む  
旧福山城の遺構を伝える長屋門は、「東御門」といわれています



の家紋をつけています。沢瀉が多くの戦国武将や江戸時代の諸大名の家紋に使われました。ことに、水野氏の沢瀉紋は有名でした。沢瀉は夏に白色の可憐な花が咲き、江戸時代には庶民に大いに観賞されたものでした。

この建造物は、明治期の初めに福山城から海路で運び、鞆の津に移築しました。1871年（明治4年）の廃藩置県に伴い、備後一帯に百姓一揆が起こります。村役人層、町方役人層の旧支配機構を変える側面を持っていたこの一揆の余波を受けて、この酒店などが焼失し、その店舗の建て替えに、買い求めて福山城の門を移築したのです。「東御門」であったと言い伝えていますが、詳細は分かっていません。

（1996年9月号に掲載）



## 蓮池と上水道

### 人々の生活を支えて

西町の蓮池は、福山城の築城時にひらかれた旧上水道の貯水池で、古くから「どんどん池」の名で親しまれていきます。

かつて樋門があった場所には、当時を偲ぶ記念碑が建っています。

芦田川下流のデルタ地帯に建設された福山城下は、井戸水に海水が混じるため、上流から上水道をひいてくる必要がありました。



蓮池  
この日も満々と水を湛えていました

江戸ではすでに1590年（天正18年）に上水道が設けられ、赤穂や近江八幡でも建設されていきました。

1619年（元和5年）福山の地に移封された水野勝成は、これらにならい、上水道をつくらせたのです。

北本庄の高崎に上水道の取入口を設け、そこから芦田川に平行して分流をつくり、本庄二股とよばれるところで大きく二つに分けました。一方は本庄の山沿いを通し、木之庄や綱木の丘を開削して蔵王の水田に流しました。そしてもう一方を、蓮池に導いたのです。蓮池からは、石碑横の樋門をくぐり、西町を外堀に沿って南下し、城南地域



護国神社南側の水路

を流れていく幹線と、護国神社と城山の間を掘り切って城東に出て、大黒町、今町、笠岡町、船町などをめぐって流れる幹線がありました。

主要幹線の構造は両側を割石で固めた溝で、町筋の多くは石蓋をした暗渠になっていました。街角には貫洞という井戸のような方形のたまりが設けられ、水道の分岐点となっていました。

干ばつの際には貫洞の石蓋が開かれ、くみ上げ井戸として利用されました。

この貫洞から木管、竹管でひかれた水が、各戸に配水されていたのです。

このようにして、上水道は旧城下町に広く分布し、人々に飲料水を提供したのです。近代水道ができたあとも、昭和20年代まで夏季の打水や、用水としてなお利用されていました。

蓮池は伏流水が豊かで、幾度かの大かんばつにも水が枯れたことがないといわれています。

（1996年10月号に掲載）

## 街道と道しるべ いにしへの旅人をおもう

江戸時代、福山城下の出入り口は、東に2か所、西に2か所あり、辻々には道しるべが建っていたと思われませんが、行方不明のものもたくさんあります。

笠岡町から寺町筋を抜け、三枚橋を渡ると笠岡街道で、東の出入り口の一つです。御船町の寺町口に、江戸時代の道しるべが元の位置より少し南に寄って建っています。高さが125cmある立派な石柱の四面に、力強い筆致



▶御船町の道しるべ



で次のように刻まれています。「左九州道尾のミチ五里 三ハラ八里 とも津三里」「右上方道 かさをか三里半 玉志ま八里 をか山十五里」「萬延元年庚申九月建」「世話人 今津屋和助 山手屋太兵衛 御領屋莊七」。

笠岡町を北進した吉津町も東の出入り口の一つで、1993年、下部の折れた道しるべが、地元の人々の熱意で北吉津町に復元されました。石柱の二面に「従是東京大坂道」「従是北石州道」と刻まれています。東は神辺街道を経て、京都・大阪へ、北は府中街道を経て石見へ通じる分岐点でした。

市民会館のある中央公園の植木の陰に、一基の道しるべがひっそりと建っています。明治33年の建設で「左トモツ道」「右ヲノミチ道」と刻まれています。霞町通りの西端に西の出入り口の一つがあり、南進する鞆街道と西進して津之郷で旧山陽道とであう街道の分岐点でした。そこに建っていたものと思われず。

長者町を抜ける道も、西の出入り口の一つですが、この通りには残念ながら道しるべは残されていません。

津之郷町谷尻のバス停を少し東に行



くと、石柱の二面に「左大坂 右ふく山」と刻まれた道しるべが、空地の隅に建っています。旧山陽道は城下の北を通っていたため、ここが城下への分かれ道でした。並んで建てられた大正5年の道しるべには、里程が細かく彫り込まれていて、大正になっても利用されていたことがわかります。

現代の道路標識は、車社会に合わせた画一的なものになっていますが、昔の道しるべには、一基一基に表情があり、そこで一息ついた当時の旅人の思いも伝わってくるようです。

※中央公園の道しるべは、霞町四丁目交差点へ移設されています

(1996年11月号に掲載)

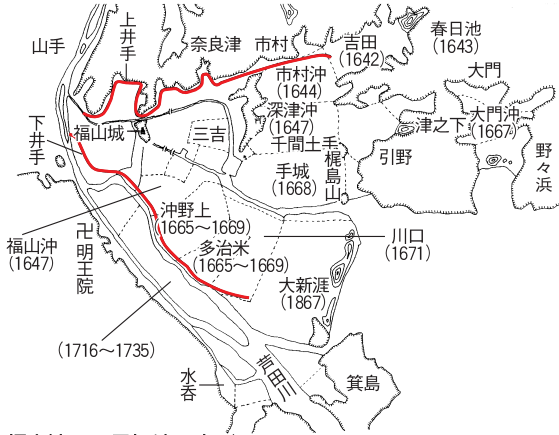
## 干拓の歴史

### 福山の基礎を築く先人の努力

江戸時代になって、生産基盤の増大を図るため、各藩はこぞって新田開発を始めました。

福山藩も、水野時代と阿部時代の後期に集中して、藩営による広大な干拓事業を行っています。

江戸時代には、芦田川が運んできた肥沃な土砂による沖積地が広がって



福山沖への干拓地の広がり

たこと、家臣に土木工事の名手、神谷治部、小場兵左衛門、本庄重政らがいたことなども幸いし、積極的に干拓が進められました。

一方、灌漑用水確保のため、芦田川改修による治水や、上井手、下井手を造った後の分水工事、さらに春日池、瀬戸池、服部大池などのため池の築造といった水利事業が並行して行われました。

干拓地の広がりを見ると、次のとおりです。野上堤防の築造により城の南東部の地に野上新開が完成。続いて、王子から引野の梶島山に向って千間土手が築かれたことにより、蔵王から引野にかけての新開地ができました。

その後も、松永から尾道高須にかけての干拓と塩田開発の大事業が行われ、また手城、大門、沖野上、多治米、川口そして笠岡富岡、沼隈草深の新開地が完成するなど、水野時代（1619年～1698年）には、瀬戸内沿岸地域に続々と大新開が出現してきました。再び大規模な新田開発が行われたのは、阿部時代の後半（1824年頃～1867年頃）で、財政建て直しのため、水呑、大新涯（新涯町、曙町）の干拓

が行われましたが、この時期に新田開発が行われるのは、全国的にも珍しいことでした。

こうした開発により、米その他の穀物の増産はもとより、綿や草といった商品作物の栽培面積が増大し、塩とともに福山藩を代表する特産物として成長しました。そして、福山の産業基盤ができあがり、現在まで引き継がれています。

もちろん、この干拓、水利事業には多大な出費と農民たちの血のにじむような労働があったこと、また農地にするため干拓地の塩分を取り除く努力が続けられたことなどを忘れてはなりません。

（1996年12月号に掲載）

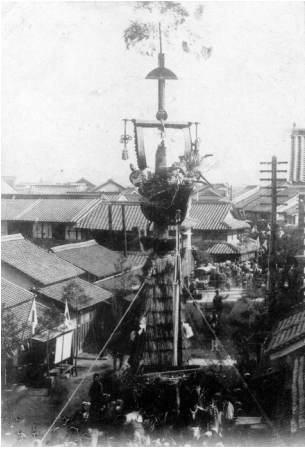
## 福山のとんど

### 町々で競った正月の火祭り

へとんど、とんどと、吉津のとんど、ハヨイヨイ……。威勢の良いはやし歌と、天高くそびえる竹組のやぐらは、福山を代表する名物の一つです。

とんどは本来、平安時代に宮廷で行われていた正月行事の一つで、「左義長」とも呼ばれ、古くは「三毬杖」とも書かれています。

これは、馬に乗って玉を打ち合う毬杖という正月の遊びがあり、これに使った道具を集めて焼いた事からこの名で呼ばれました。実際は、杖に見立てた青竹を3本束ねて立て、その前



町場を練り歩くとんど行列

で陰陽師や楽師が歌いはやしながら焼いたのが始まりといわれています。

中世になると民間に伝わって、正月の門松・しめ飾り・書き初めなどを持ち寄って焼く悪魔払いの行事として各地に普及し、竹が焼けてはじける音から「とんど」の名称が出たともいわれています。

福山のとんどは、初代福山城主であった水野勝成の入城を祝って、従来深津村で行っていたとんどにちなみ、町々が竹の枝に各種の飾り付けをしてかつぎ回ったのが慣例になったものです。鞆で6本、城下で30本のとんどが



古式とんどの飾り(懸鯛と諫鼓鶏)

造られ、町々をねり歩いたと伝えられています。

飾りは、笠岡町の諫鼓鶏、吉津町の鶴亀、上魚屋町(現在の城見町辺り)の懸鯛、下魚屋町(宝町辺り)の三方に伊勢海老、船町の宝船など町ごとにシンボルが決められていました。そして、各町はこの飾り付けを互いに競い、観客はその出来栄を大いに楽しみました。

飾り付けられたとんどは、正月14日朝に東堀端(城見町辺り)に整列して城主への披露に供え、その後町場をかつぎ回り、三吉町板橋の東でにぎやかに焼いて送るのが習わしとされてきました。

盛大に行われていたとんども、戦後下火になり、一時姿を消した時期もありましたが、近年、本通りや久松通りの商店街振興組合によって復活され、毎年正月15日には、同商店街を中心として行事が行われています。

※現在、商店街でとんどは行われていません

(1997年1月号に掲載)

## 入り川にかかる橋 にぎわった二つの橋

福山城の外堀は、築城時入り川で海とつながっていました。

入り川両側の町人町を結ぶため、また、城下の東西を結ぶ幹線道路を整備するために、二つの橋が架けられました。上手の本橋と、下手の新橋です。

本橋は、現在の船町と元町の間の道路に南北に架かっていました。江戸時代中ごろ、享保期に記された水野家に



明治初期の天下橋



木綿橋は、入り川の埋め立てにより、1938年に廃止されました

関する記録『福山領分語伝記』には、伏見城や櫓のほか数々の建物が拝領、移築された（1622年ごろ）とあります。その中に「宝珠附之御橋四ツ拝領」と記され、そのうちの 하나가「天下より御拝領之橋」として町民の住む城下に譲られたということで、通称天下橋と呼ばれました。橋の南側では1か月に6回開かれる六斎市が立ち、にぎわいを見せていました。

もう一つの新橋は、水野家2代勝俊の時代（1639〜55年）に架橋されました。現在の船町の本通りあたりです。通称木綿橋の名で親しまれ、現

在でもバス停の名称に使われています。

通称の由来は、この橋の上で木綿市が繁盛したからと伝えられています。

綿は、有利な換金作物だったので、水野時代、新田開発にあわせて盛んに植え付けが行われるようになりました。

勝種の時代には、種を取った繰綿がおよそ4万俵余、福山からほかの地域へ移出されています。

入り川は、城下町商業の中心であり、米をはじめ、綿、い草、畳表など領内特産物の積出港としての機能を果たし、二つの橋は交通の要でした。

明治になると紡績工場が駅前にでき（1897年）入り川は石炭船が往来しましたが、時代とともにしだいに埋め立てられて、二つの橋も姿を消していききました。

リーデンローズの前の道から国道を斜めに横切り、駅前まで続く道路がかつての入り川です。この道を歩きながら、昔日の福山に思いをめぐらせてはいかがでしょうか。

（1997年2月号に掲載）

## 芦田川改修の跡 往時の流れを伝えて

神島橋に立ち南を眺めると、芦田川の川面は早春の光にきらめき、あでやかな表情を見せています。しかし、改修以前の芦田川は、毎年堤防の決壊、氾濫を繰り返す暴れ川でした。

特に、1919年（大正8年）7月の大洪水は、上流の府中から福山までの流域すべてが水につきり、大きな被害をもたらしました。これを機に、流域の1市3郡で「芦田川治水同盟」を結成し、大正末から戦後に至る40年に及ぶ大改修の第一歩を踏み出しました。改修前の芦田川は、神島橋辺りで南



神島橋から南東を望む

下する本流と、東に迂回し草戸町の外縁に沿って流れる鷹取川に二分していました。

鷹取川には、地吹町の荒神社そばに鷹取橋が、またその上手の地吹町公園辺りに軌鉄道の木製橋が架かっています。今でも、荒神社境内には「鷹取橋 大正二年三月架橋」、鷹取中学校の正面わきには「た可と里はし」と刻まれた親柱が残されています。

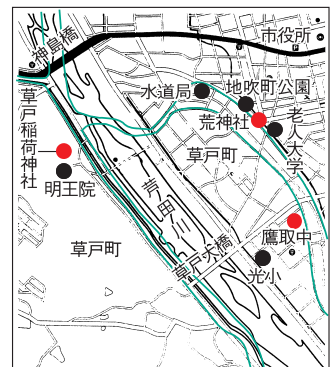
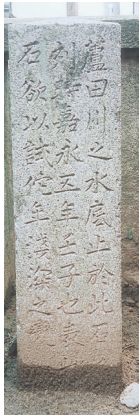
この荒神社や地吹町公園の西を延びる道路が、かつての鷹取川の左岸堤防でした。さらに、荒神社から南西に緩やかに湾曲しながら草戸大橋に続く道が元の鞆街道で、中州の中央を流れる中川には新橋が、本流には銭取橋が架かっています。

芦田川右岸草戸地区の堤防下を南北



▲荒神社の石柱

▲高さ約1mの「浅深試石」



に走る細い道が、元の本流の堤防で、舗装前はずっと低かったそうです。その道沿いに、石垣を数段に築き長屋門と土塀で屋敷を囲った家が何軒かあります。上田篤著『橋と日本人』（岩波新書）には「水防家屋」と記されていますが、屋敷全体を地上げすることによって水の侵入を防いだのでしよう。

また、草戸稲荷神社の鳥居の傍らには、1852年（嘉永5年）に建てられた、俗に「芦田川浅深試石」と呼ばれる石柱が残されています。芦田川の水底にこの石を止め、川床の浅深を試し水害を予知したものです。

現在、改修跡の様子を伝えるものは少なくなりましたが、これらはいずれも往時を偲ぶものといえます。

（1997年3月号に掲載）

## 藩校誠之館

### 時代に応じた新しい教育制度

江戸時代末期、日本は開国を求める諸外国と緊張した関係の中であり、国内政治でも、天保改革の挫折という難局に直面していました。

ときの福山藩主阿部正弘は、老中筆頭という幕府政治の最高責任者でした。正弘は、幕府にとって有為な人材を広く求め、積極的に登用し、この難局に対応しました。福山藩内でも、文武を



誠之館記念館

奨励し、学校を設立して人材養成に力を注ぎました。こうして、藩校誠之館が誕生しました。

1854年（安政元年）、藩校誠之館は、現在の霞町一丁目（中央公園一帯）に設立されました。

誠之館設立以前、福山藩には1786年（天明6年）に設立の『弘道館』という藩校が現在の西町一丁目にありました。誠之館はこの弘道館を拡充発展したもので、敷地は8,000坪と弘道館の数倍もありました。おもな施設は学堂・演武場・馬場・矢場などでした。

教育内容はそれまでの儒学はもとより国学・洋学・医学・数学・習字・礼法そして軍法と、当時としてはすべての学問にわたり、現在の総合大学に匹



中央公園内に建つ誠之館跡の碑

敵するものでした。

またこれらの教育課程を学習し、「考試」という試験に合格した人は、藩の役職、一定の俸禄・扶持米が与えられました。これは「仕進法」というもので、阿部正弘が行った特色ある登用制度でした。

誠之館創設当時の遺構は、学堂正面玄関がただ一つ残されているだけです。1932年（昭和7年）学校が三吉町に全面移転するとき、旧玄関を校舎正門横に移し、一室を建て増し、誠之館記念館として保存することとなりました。1969年（昭和44年）現位置の木之庄町への再移転のときも、記念館は本館前広場の一角に移築されて、今日にまで及んでいます。誠之館の変遷を物語る大切な建物です。

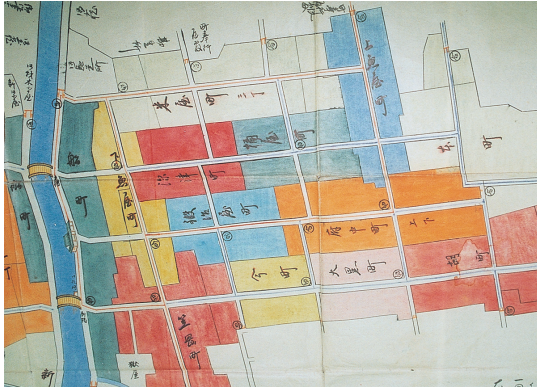
（1997年4月号に掲載）

## 城下の町割り

### 特徴ある町名の町並み

城下の町づくりは、福山城築城と並行して進められました。当時、城郭の周りは芦田川が流れ込み、南には海が広がっていたので、治水と干拓工事を行いつつながらの城下の町割り(都市計画)となりました。

城郭の西部と南部に広く侍屋敷を選定し、東部から南部の一部を町人町に定め、その外側にはさらに広く侍屋敷



「福山三十町町割水道図」(一部)  
今では使われなくなった町名があるのがわかります

を配しました。城郭の三方を侍屋敷で囲んだ上に、侍屋敷の外側の要所場所に寺院を配置し、城郭の防衛を第一とした城下町を形成していきましました。

その中で、町人町は、武士の城下町集住に伴う物資の供給、領内物産の集積と販売といった領国経済の中心として機能を果たすため、海上交通に便利な入江筋と街道筋にあたる吉津方面にかけて造成されたのです。

まず、大手門前に神島(現在の西神島町)から商人たちを移住させ、入り川に本橋(天下橋)を架け最初の南北道を通すことにより、米屋町、本町、府中町といった町筋ができ、さらにその東に胡町、大黒町、笠岡町と通筋ができあがりましました。これを吉津橋と入江をまたぐ新橋(木綿橋)でつなぎ、



かつて「通り町」とよばれた胡町付近

南にも町並みを発展させました。

こうした町人町の拡大にはずみをつけた要因として、水野勝成の奨励策があげられます。新しくできあがった城下に来て自分で屋敷地を造り商いをする者には、永代地子銭(土地にかかる税)や諸役(領内建設のための労役)などを免除するというもので、この特典は明治に至るまで踏襲されました。

できあがった町には、職業的な集住を物語る鍛冶屋町・桶屋町・藺町・大工町・医者町・米屋町・上・下魚屋町・出身地で呼ばれるようになった府中町・深津町・笠岡町・神島町、縁起をかついだ大黒町・胡町・福徳町・長者町、地形や方角から呼ばれる道三町・中町・西町・東町、成立期を示す本町・今町・新町、船が発着する船町、天神社通りの天神町といった特徴ある町名を持つ町並みが次々と形成され、機能的で活気あふれる新都市建設が進んでいったのです。

(1997年5月号に掲載)



## 草戸千軒町遺跡

### よみがえる中世の町

明王院東側にある芦田川の中州を散策すると、足元にたくさん土器や陶磁器の破片を見つけることができます。

ここには、中世（鎌倉時代～室町時代）のころ、市場町・港町・常福寺（現在の明王院）の門前町として栄えた「草戸千軒」と呼ばれる集落がありました。この集落は、江戸時代にはすでに消滅し、文献にわずかに記された伝説の町となっていました。しかし、1930年ごろに行われた河川改修工事での集落跡が確認され、1961年から30数年間にわたる発掘調査が行われました。その結果、それまで国内では一



広島県立歴史博物館  
草戸千軒Ⅰ展示室  
「よみがえる草戸千軒」

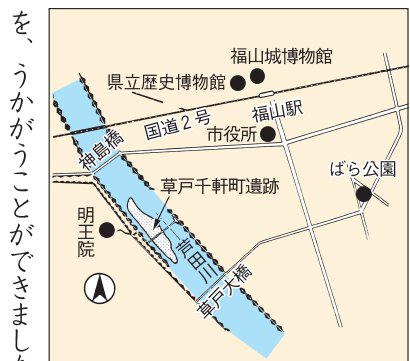
度も明らかにされていなかった、中世集落の生々しい姿がよみがえってきました。

遺跡は、6万3千㎡の中州全面で見つかり、さらにその外側にも広がっていました。背丈を越える高さの柵や小溝で区画された集落内には、井戸や建物が多数造られ、小舟が通る水路も設けられていました。「草戸千軒」は、水運を中心に発展した、大規模で計画的な集落だったようです。

さらに、出土した土器や陶磁器、木・金属・石製品などの遺物を見ると貨幣経済が発達し、国内はもとより中国大陸や東南アジアからも交易品がもたらされていたことがわかります。また、当時の人々の装束や信仰の様子など、それまで文献や絵巻物などでしか知ることのできなかった細やかな生活ぶり



発掘調査の様子



を、うかがうことができました。

この発掘調査によって、文献だけでなく、地下に埋もれた遺跡からも中世の実態を明らかにできることがわかり、その後の中世考古学発展のきっかけになりました。そして、従来の武士や農村を中心とした中世社会の見方が大きく変わり、商工業・金融業・運送業などのさまざまな生業に携わった人々の姿が注目されるようになりました。

なお、この遺跡の発掘調査成果は、広島県立歴史博物館のメインテーマとして一般に公開展示され、歴史と文化の町・福山を紹介する大きな力になっています。

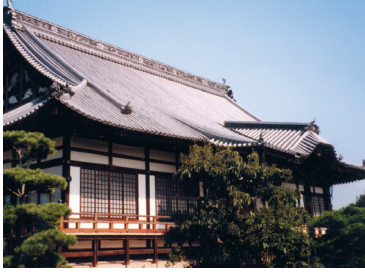
(1997年6月号に掲載)

# 妙政寺の建造物

## 水野氏と関わる日蓮宗寺院

福山城の北を流れる御手洗川に沿って東に少し歩くと、小高い丘の上に老松を背にしてそびえる妙政寺があります。

この寺は、長久山と号する日蓮宗の寺院です。福山城主水野氏と関わりが深く、天正年中（1573〜92年）に三河国刈谷（愛知県）に創建したものを、水野氏の国替えに伴って寛永年間（1624〜44年）に福山へ移したものです。その後、1652年（慶安5年）に二代城主勝俊の娘万寿が病になった際、この寺で祈とうを行ったこ



妙政寺本堂

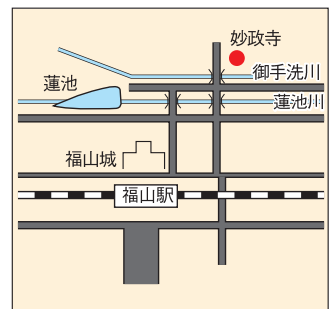
とから勝俊一代限りの菩提寺となり、1666年（寛文6年）に現在の地に再興されました。

境内には、本堂・山門・唐門・鐘撞堂など移転当時に建てられたと推定される建物や、勝俊の墓所があります。本堂は、入母屋造・本瓦葺で、桁行26・1m、梁間16・3mの壮大な規模です。正面には唐破風の付いた三間の向拝が付き、背面には位牌堂が設けられています。内部には方丈の間が六間あり、その三方に入側と切目縁が巡っています。上部の組み物など細部の意匠も優れた重厚な建物です。

県内では、1656年（明暦2年）に建立された国前寺本堂（広島市）とともに日蓮宗本堂としては古い例です。山門は、規模の大きな一間一戸の四



妙政寺山門



脚門で、脇に潜戸の付いた土塀が附属しています。本柱・控柱とも円柱で、軒は二軒繁垂木、天井は鏡板張が施されています。組み物に禅宗の様相が見られ、意匠的にも優れています。

唐門は、勝俊墓所から近年移築され、現在は初代勝成の位牌所表門となっています。本柱が円柱、控柱が角柱で、柱はたがいに頭貫で結ばれており、墓股や杵肘木などの組み物が多用されています。建立は、勝俊の没した1655年（承応4年）と考えられます。鐘撞堂は、方一間で四方吹放しの四脚鐘楼です。柱は、角柱で内転びに立上り、軒下には見事な組み物を取り付けてあります。なお、吊鐘には1656年（明暦2年）の銘が刻まれています。

（1998年12月号に掲載）